

2025 年度 活水女子大学入学式

院長 祝辞

湯口隆司

ご入学おめでとうございます。活水女子大学へのご入学を心から歓迎いたします。

さて 145 年間、活水学院はキリスト教をもとに建学の精神に立ち、その時代に沿ったふさわしい内容で女子の教育を実践してきました。今年度、初めて看護学部への男性学生の入学を認めました。職業人としてまた社会に貢献できる女性の育成を、活水「建学の精神」の到達すべき教育の目標地点としてしてきました。最近の看護の領域では男性看護師が社会的にも業務内容からも欠かせない存在であることに鑑み、はじめての入学となりました。男子学生の皆さんも心から歓迎をいたします。

活水での学びは、専門的な知識の吸収だけでなく、大学卒業後のもっと長い展望の中で、かけがえのない一回限りの人生をどう歩むか、それを大学生活で思索し、経験できる学校でありたいと思います。「人生を、確信をもって歩む」ことができる人を育てるのが、活水学院のコアとなる教育価値観です。それは女子・男子に係わらず変わりません。

この実現に活水女子大学が皆さんに提供するのが「礼拝」です。讃美歌や聖書にはじめて出会う学生も多いと思います。キリスト教がどんなものかよく分からない人も多いでしょう。しかし日本に限らずキリスト教主義の学校・大学が世界中で大変多いということは知っていると思います。キリスト教と「人を育てる」、つまり教育はとても関係が深いのです。

本日は「聖書」の中の人の成長について、「種をまく人」の「たとえ話」を短く紹介します。（マタイ 13 章、マルコ 4 章、ルカ 8 章）

種はとても小さいのですが、それはやがて成長して大きくなり、葉をつけ、実がなります。種には成長する力が秘められています。聖書のたと話は結論から言えば、種のまかれる土地は肥沃な土地です。そしてこの「種」はじつは「言葉」のたとえです。また実に長い年月の種の成長も指しています。「言葉」の成長は子どもから大人への成長と同時並行です。しかし種である「言葉」とは、SNSで発信される情報、短い言葉のやり取りではありません。心の深くに沁み込み、楽しみだけでなく、怒りや痛みを経験した「言葉」は、その人を育てる「言葉」、自立した自由な「言葉」へと変化します。人格の形成する言葉です。そのためには種が地面深く根をはり、「活きた水」(活水)を吸収しなくてはなりません。神さまとの出会いを活水という名称は指していることも覚えてください。

さて本日入学された皆さんのそれぞれの種は、神さまが「種をまく人」となり、今この活水で皆さんの心の中に蒔かれました。「神に信頼し、困難な時でも、神さまのみまもりがあること」を信じています。「ひとのためになる」人材、水を独り占めしないで分かち合える「活水」の学生として、これからの歩みが、神さまに守られ、導られますようにと祈り、院長の祝辞といたします。